
すぴんおふ！

ふっしー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すぴんおふ！

【Nコード】

N7768Y

【作者名】

ふっしー

【あらすじ】

金曜日の放課後。恋焦がれる高校生、里美公太は屋上で告白をした。しかしその告白は失敗に終わる。なんと今年に入っすでに四連敗。それも決まって「あなたは違う」と言われてしまう。告白失敗に呆然とする公太の前に現れた黒い巫女服の女の子。彼女の名前は朱夏。縁結びの神を奉る巫女だという。朱夏が語りだした公太の告白失敗の理由。それはなんと公太の主人公時間が無くなったことが原因だった。主人公時間とは、文字通り人生の間で人が主人公になっていられる時間。その時間でなければ恋愛は成功しない。つま

り公太は二度と恋愛が出来ない体になってしまっていたのだ。だが、主人公に戻る方法が一つだけ存在すると朱夏は語る。その方法とは『他者の物語に脇役として登場すること。脇役が他の主人公にとって、重要な存在となり人気者になれば、スピンオフとして主人公に返り咲けることがあるというのだ。この話を聞いた公太は、巫女の朱夏、親友の優と共に、主人公に戻るために名脇役になることを決心する！ 脇役視点で物語を描くドタバタ学園ラブコメディー！

プロローグ

「俺と——付き合ってください……！」

……ふふふ……、完璧だ……！！

金曜日の放課後。

一週間の中で最も気の緩むこの時間帯に、俺こと里美公太^{さとみこうた}は人生の中で最も緊張していた。

静まり返った屋上で、思春期の男女が二人きりで向かい合っている。

聞こえるのは、風の音と微かな生徒の声と、そして俺の心臓の鼓動。

神々しくも切なく輝く夕日をバックに、俺は目の前の彼女に告白した。

了承を得るために差し出した右手。

角度、スピード、タイミング。まるで計算し尽くしたかの如くしなやかな動き！

それに加えて俺の表情。

恐怖、期待、緊張、その全てに堪え、必死に真剣な顔を作り出す。俺は本気だとの意思表示を視線で行う！

さぞかし爽やかで、誠実な印象を与えられたことだろう！

彼女の表情はどうだ！？ 見てみる！ 頬が赤らんでいるではないか！

これも俺が今まで実行してきた作戦の賜物だと言えよう！ それはもう苦労したんだ！

出会いからこの告白まで、俺は様々な手を尽くした！

彼女の情報を得て、周囲の人間関係に根を回し！ 同情を誘い味方を作った！

彼女の両親から姉妹、親友に至るまで！ クラスの皆からも応援

された！

屋上に彼女を誘ったとき、クラス中から黄色い悲鳴が飛び交った！
その時の彼女は、恥ずかしそうにしながらも、期待するような視線をこちらに送ってきたほどだ！

俺、そしてクラスの誰もが、新たなカップルの誕生を確信していた！

そしてこの告白！ これで断る女子なんているはずもない！！
恥らう彼女。いやあ、焦らしてくれるぜ！

しばらくすると、彼女はおずおずと口を開いた。

彼女の第一声。それは栄光の告白了承に違いないのだ！

——さあ、答えてくれ！！

「——ごめんなさい。——あなたじゃないの」

うんうん。そうだろう、そうだろう。こんな雰囲気の中、断る女子なんて——

「——え……！？」

落ち着け、俺。何かの聞き間違いだ。そうだ、そうに違いない。

「ご、ごめん！ よく聞こえなかった！ もう一度お願い！！」

……今度こそ、しっかりと聞けぞ！！ さあ、もう一度……！！

「——ごめんなさい。あなたは違うから……」

ふふん。そうね。やっぱり聞き間違いじゃなかった……って。

「——ええ！？ ええええ……！？ ど、どうして！？」

「ごめんなさい……。さよなら——」

俺の言葉を完璧に無視し、彼女は俺に目もくれず屋上から走り去って行った。

後にはポツンと俺一人。

「……何故だ！？ こんな馬鹿なことが……！？」

まさかの告白拒否。完全に想定外だ……。

「あ、ありえないぞ！？ 一体何が起こったというんだ！？」

告白する前の彼女は誰が見たってOKだった。それなのに一体どうして!?

「俺、何か間違っていたのか!? 知らないうちに彼女の嫌がるようなことを……?」

いや、それはないはずだ! 彼女の性格、思想、趣向、人間関係や家族構成に至るまで徹底的に研究し、彼女の目を惹き、好みそうな行動をしていたんだ。

地雷を踏むようなことは決してなかったはず!

「なのに、どうしてこうなった……」

……あれ?

俺はしばらく考えて、一つ気になることを思い出していた。確か以前にもこんなことがあったような……。

あれは確か……前回の告白のときも……。

——数ヶ月前——

「俺と付き合ってください!!」

「ごめん、あんたじゃないから」

「なんですと——!?!」

……ってことがあったような……。

「デジャヴ、なのか……?」

そういえば最近によく女の子に振られる。

昔の俺は、言っでは何だがモテモテだったんだ。

常に彼女はいたし、別れてもすぐに違う彼女が出来たってもんだ。そんな俺が、今はこの有様だ。告白しても実らない。盛者必衰ってか? やかましい!

今年に入って、なんと4連敗中。しかも全部決まって——

『あなたじゃないの』

——と言われて断られている。流行っているのか……?

「あー、また振られたか……」

ともあれ振られてしまったものは仕方ないよね。

「まあいいや！ 次の恋を探そう！」

——と口にして決意を固めた——その時だった。

「——あなたには、もう無理よ——」

俺しかないはずの屋上に、どこからともなく凜とした声が響き渡った。

「だ、誰だ！？」

驚いた俺は声のした方へと振り向く。屋上の給水タンクの上にその姿はあった。

「あ、あんた誰だ！？ 一体そこで何してるんだ……！！？ ……つて、委員長！？」

どんな展開！？ なんで委員長があんなところに！？

俺は驚愕を隠しきれなかった。その見覚えのある彼女の名は縁朱^{えにしし}夏^{ゆか}。

我がクラスの委員長で、活発な性格と、美麗な外見で、クラスどころか学校中から人気を集めているアイドルなのだ。

だが、その彼女が何故か巫女さんスタイルでそこに立っていたのだ……！！

それだけではない！ 特筆すべきはその巫女服！

真っ黒な巫女服だって！？ そんな巫女服、見たことないぞ！？

「なんで巫女さん！？ しかも黒だと！？ …………… いや、今それはどうでもいい！！？」

どうでもいいわけないけどね。実はすげー気になってる。

「委員長、今のセリフ、一体どういうことだ！」

「その答えは——とうっ！！」

「……飛んだだとうっ！？」

委員長は得意げに給水タンクの上からジャンプした！

「あ、危ないって……！！」

——と、俺は注意したものの、黒巫女服をはためかせ空を踊る姿はとても美しく、つい見とれてしまっていた。……のだが——

「——ぎゃうー!」

予想通りというべきか、着地失敗。

「あちゃー……。あれは痛い……」

委員長はしばらく悶絶していたが、俺の視線に気づき、さっと立ち上がりこちらに向き直った。

「やり直しよ!」

「……何を……?」

「——あなたには、もう無理よ——」

おお、今こけたことを完璧になかったことにしている!! なんてスルースキルだ!

……って言ってる場合じゃないよね。

「なあ、委員長。それってどういうことだ?」

「——あなたには、もう無理なのよ——」(チラッ)

「……」

……マジで最初からやるのかよ……。

「……」

「……」(ウルッ)

いや、そんな涙目にならなくても……。どれだけ恥ずかしかったんだよ……。

仕方ない、少しだけ付き合ってやるか……。

「なんで巫女さん!? しかも黒だと!? ……いや、今それはど

うでもいい! 委員長、今のセリフ、一体どういうことだ!」

……でセリフ合ってたよね?

「どうもこうも、あなたはもう二度と恋愛することが出来ないってそう言ってるのよ」

あっけらかんと言いつつ巫女さん。いや、委員長。セリフは合ってたみたい。

バックには夕日。正直、絵になるよなあ。……着地に成功してい

ればもつと凄かったのだろうけどね。

——……いや、違うだろ俺！

今、とんでもない事を言われたぞ！？ 俺はもう二度と恋愛が出来ないって！？

「あなたはもう一生恋愛することが出来ない」

「一生って……。もしかして死ぬまで？」

「そ。死ぬまで」

言い切られた！？ 納得いかんぞ！？

「なんでだよ！ どうしてお前にそんなことが分かるんだ！？」

「見えるのよ。私には——」

薄っすらと笑みを浮かべる巫女さん。目には涙が浮かんでるけど。やっぱり痛かったんだなあ……。

でも全力で耐えている。こけて打った場所をちよいちよい気にする姿が実に可愛い。

黒巫女服も間近で見ると迫力あるね。うん。とても似合ってる。

しかも良いにおいがするし！

ショートヘアも意外と巫女服とマッチしてるし。

薄っすらと膨らむ胸も——……うん。こっちはまあまあかな……察しよう。

思わず顔を緩めてしまう俺。しょうがないよ。だって可愛いんだもん。

……って俺はこんなときに何考えてるんだ！ 今はそれどころじゃないだろ！？

でも可愛いデヘヘ。

「——ってこと」

「……フ……フオオオオオ……」（葛藤中）

「ねえ、ちゃんと聞いているの？」

「もちろんさ！」

嘘です。半分くらい聞いてませんでした。

「そう。じゃあ話を続けるわね。それで私には人の“主人公時間”

をすることが出来る能力があるの」

へー、見ることが出来るんだ！。すごいねー。

「……………って主人公時間って何よ！？」

「主人公時間っていうのは、文字通り人生の間で主人公になっていられる時間のこと。主人公時間は誰もが持つていて、その間とはとにかく異性にモテるの。でもあなたはその主人公時間を——」

な、なんとなく次のセリフが分かるぞ。もの凄く嫌な予感。

「——全部使い切ってしまったの」

「なんだって—————！？」

予想通りすぎるー！！　今までモテモテだったのはそういう理由だったのか！？

……………って、おいおい待て待て落ち着け俺。まだ慌てる様な時間じゃない。

いくら可愛いとはいえ、このこの巫女さんの言うことを信じるってのか？　そんなオカルト無理があるぞ？

「……………なあ、その主人公時間って、本当にあるのか？」

「あるわよ。現実にあなた、たった今振られていたじゃない」

「なぬ！？　お主、見ていたと申すか！？」

「ええ、惜しかったわね。主人公時間中だったら、間違いなくお似合いのカップルになっていたでしょうに」

チクショーっ！　やっぱりそうだったのか！　お似合いのカップルだったなんて……。なんてこったい！

「ちなみに、過去3回全部見てたわ」

「なんだって—————！！」（二回目）

なんかストーリーカーマがいだな！　でも可愛いから許しちゃう不思議！！

……………二度目の絶叫。さつきから叫んでばかりだな俺！　喉痛い……。

「それに全てこう言われてたでしょ？　『あなたは違う』ってね」「何故それを！？」

凶星だった。過去全て例外なくそう言われていたのだ。

「これはね。あなたは主人公とは違うって、そういう意味なのよ？ ヒロインはいつだって主人公と恋実るものでしょ？」

そうか。だから今まで同じセリフで振られたわけね！ なるほど、納得！！

………するわけがなからう！！ すると俺はもう一生恋愛が出来ないってのか！？

「……なあ、どうにかなる方法はないのか？」

俺はすぐりつくような目線を委員長に向ける。

「ないわ」

「即答！？」

視線すら合わせてくれない！？ 血も涙もねーのか！？

「……ダメだ……。もう死のう……」

「——と、言いたいところだけど、………って、聞いてる？」

委員長が何か言ってたみたいだけど、俺はすでに現実から逃避していた。

「もうダメなの！ 一生童貞なんて、ボクには耐えられないの！」

「あー、もしもし？」

「もうボクに構わないで！ もう決めたの！ 死ぬの！ 飛び降りるのよー！」

「……………」（イラッ）

「いやあ！ 止めないで！ ボクを止めないでえー！」

「……………いい加減にしないと一生童貞にするわよ？」

「すみませんふざけすぎましたゆるしてください」

一気に現実に戻されたぜ……。死ぬ気なんてありませんよ？ ちよつとふざけただけです……。ん？

「『と、言いたいところだけど』ってことは………もしかして続きがあるの？」

「あるわよ！ 聞くの！？ 聞かないの！？」（イラッ）

「聞きたいに決まってる！」

「次ふざけたら一生童貞だから」（ニツコリッ）

委員長は笑顔ながらも眉毛を引きつらせていた。笑顔が怖いとはこのことだ……。

そんなに怒らなくてもいいじゃない。ぐすん。

でも怒った顔も可愛いなあフヒヒ。

「あなたはこれから脇役として生きていくのよ」

「……脇役、だって……？」

「そう。物語には必ず必要となる脇役。それをこれから演じていくの」

「どういうこと？」

よく判らん……。

「あなたはすでに主人公時間を使い切った。つまりあなたには主人公になる力が残ってない。それでも主人公になりたい。そう思うなら方法は一つ。他者の物語に入って脇役を演じること」

「他者の物語？ 脇役を演じる？」

「主人公の人生に大きく影響を与えるような名脇役は、それなりの力を得ることが出来るわ」

「つ、つまり……どういうことだってばよ……」

俺の頭上には“？”マークが大量に浮かんでいることだろう。

「簡単な話、他者の物語に入り込んで活躍し、人気者になればいいってこと」

「人気者になると、どうなるんだ？」

「例えばドラマの脇役が人気になれば、その脇役を主人公にしたスピンオフ作品が作られることがあるでしょ？ それと同じことね」

ふむ。なるほど、実に分かりやすい。

「判った。でも一体どうやって脇役になればいいんだ？」

「これから主人公時間を迎える人と仲良くなつて、恋愛の手伝いをすればいいの」

「そういうことね」

よくあるパターンで安心した。……よくあるのか？

「他者の物語にどんどん入って活躍すれば、いずれスピンオフが作られるかもしれない。でも、それはとても大変なことよ？ 主人公の期待、信頼に全力で答えないといけないのだから。あなたはどうする？ やってみる？」

——どうやら俺の主人公時間はもう無いらしい。このままだと一生独身だつて！

そんな人生はまっぴらご免だ！

ならば答えはひとつしかないだろう！

「やるに決まってるんだろ！ 名脇役になってやるぜ！」

なんとしても主人公に戻ってやる！

それに脇役ついても、ただ恋愛成就の手助けをするだけだ！

なんてことはない！ ……はず！

……ん？ 不意に疑問が俺の脳裏をよぎった。

「なあ、なんで俺に主人公時間がないこと、教えてくれたんだ？

お前にとつてはどうでもいいことだろう？」

「ええ、確かにどうでもいいわ」

……なかなか辛口な巫女さんだな。そこがまた味がある！

「でも、あなたには興味があるの」

「俺に興味！？」

うはっ！ 久々に俺の青春が来たか！

「あなた、色々と雑用してくれそうだからね」

……そういうことね。まあ期待はしてなかったよ。何せ主人公じゃないもんね……。

「私は縁結びを司る神様の巫女なの。我が家は代々縁結びの神様を奉っていて、神様の手伝いをするのが仕事なの。でもね、最近仕事が増っちゃって。一人では限界を感じたから、あなたに手伝ってもらいたい。それがさつき言った『脇役を演じること』。それであなたは主人公に戻る。私も楽できる。一石二鳥だとは思わない？」

「なるへそ。そういうことだったわけね」

ふーむ。要するにバイトみたいなものか。給料はお金の代わりに
主人公時間。

「では来週から行動開始よ！ 手順や注意事項はその時に伝えるわ」
告白失敗、衝撃の事実から一転、この急展開。

いやあ、人生ってどうなるか分からないものですねえ……。

そんな俺の人生よりも、一つ気になっっていたことがある。

「ところでさ、何で巫女服着てるんだ？ しかも何故黒？ 神様に
仕えているからとか、なにか複雑な理由が？」

「——ただの趣味よ！！」

「なんだって————！！」（三回目）

二度あることは、やっぱり三度あったね。三度目の正直なんてこ
とわざは知らん。

第一話 巫女さんは委員長

「ふわあ~~~~」

おもちゃ

主宮高校に通う俺、里美公太は、恥ずかしげもなく大きな欠伸をしていた。

ね、眠すぎる……。昨日、寝たの三時だもん……。そりゃ眠いつて。

なんだか考え事が多くてね。特にここ最近、色々とありすぎて……。告白失敗とかね。それと――

委員長が巫女さんだったりとか！！……。俺が二度と恋愛できないのだとか……。

なんだかんだでショックが大きかったんだよね。だからこそ、今日は早めに登校してきたわけだし。

そうだ、先週の巫女さん。彼女の話しよう。彼女は……って、ちょうどいいときに登校してきた。

「おはよう、公太」

目の前に立つ女子の名は縁朱夏。えにししゆか我がクラスのクラス委員長を務めていて、顔良スタイル良し、性格良しの黒髪短髪の似合う、学校中の人気者だ。

「公太。――判ってるでしょう？」

自覚しているのかっていう目ですね……。もちろん判ってますよ！ 今日から脇役人生スタートなんでしょう？

「私が巫女コスプレをしたこと、喋ったら――殺すわよ？」

「そっちの話！？ あれ、すごく良かったのに……。出来ればみんなに広め――」

「判ってるわよね？」（ニッコリ）

「……はい」

無意識に首が縦に振幅していた。怖ええ……。話を変えよう……。委員長。先週言っていた手順や注意って、一体何なんだ？」

「私のことは朱夏でいいわ。これからはパートナーだもの。私もあなたのことは公太って呼ぶから」

いきなり名前で呼び合うだ！？　なんてハイレベルな！

「それはさすがに恥ずかしいぞ！？　委員長」

「……何照れてるの？　これからは当分仕事を手伝ってもらわなければならなし、何より公太。あなたはもう主人公じゃないのよ？　照れる要素ないでしょ」

「ふぐっ！」

「だから安心して名前で呼びなさい」

「……わかったよ、朱夏……」

「理解できたならよろしい。詳しいことはまた後で話すわ。とりあえず主人公を見つけないとね。今はまだ見当たらないけど近いうちに現れるはず。主人公が現れたら、私はすぐに分かるから、見つけ次第連絡するわ。……いい？　コスプレのことは内緒よ！」

やけに念を押して、自分の席に戻っていったな。そんなに隠すことか？

「……急に名前で呼べとか、コスプレしていること隠せとか、まったく女の子の気持ちにはわからんなあ……って！？」

突如視界を塞がれた。この硬くてこつこつした感触は……。

「おう、公太。金曜日はどうだった？」（だきっ）

「（だきっ）じゃねーよ！　朝っぱらから鬱陶しいんだよ！　ドラ！」

黒光りする筋肉質な腕を振り払う。えーい、離せ！　男に抱かれる趣味はねえ！

「つれねえなあ、三日ぶりの再会だというのに」

「やかましい！」

俺の視界を塞いだ張本人、馴れ馴れしくてムキムキなこいつの名前は浅間龍二あさまりゅうじという。

学校一体格が良く、スポーツテストでも常に上位成績。反面、学

力は最下位。

趣味は筋トレとギャンブル全般。麻雀が好きで、名前にも龍とあることから、俺たちはドラと呼んでいる。

いかつい外見や、過去にやんちゃしてたという噂のせいで、皆からは敬遠されている。根はいい奴なんだけどね。

「どうだったんだよ？ 成功したんだろ？ あの雰囲気で失敗なんてありえないからな！」

「……うつ！」（グサツ）

そうだった。まだ皆には話してなかった……！

「ま、まさかお前、成功を通り越してすでに性交までしたんじゃ……。週末を利用して彼女としっぽりな関係になったとかねえだろうな……！？ ま、まだ早いぞ！」

「は、はは」

笑うしかねえ……。イテエよ、心がよお……。

「羨ましいねえ！ こいつう……！」（ぐりぐり）

「止めるドラ！ いてえ！」

痛い痛い、ほっぺたに指を突き立てるな！ そしてこれ以上俺の心の傷を広げるな！！

くそう！ こいつどれだけ力があるんだ！ どけようとしてもビクともしないとはっ！ 誰か助けて！！

「——ドラ、公太が痛がつてるよ」

「その声は——優！！」

助けがきた！ 俺はその救世主へと視線を送る！

長髪をポニーテールのように後ろで纏め、長身でモデルのようなスタイルの眼鏡が似合う、このイケメン。名前は和久井優^{わくいゆう}という。

優という名前の通り、成績優秀、運動神経抜群の超優等生なのだ！ ちなみに俺と優は幼稚園からの付き合いで一番の親友なのだ！

ほらほら、親友が困っていますよ！ さあ、助けておくれ！

「公太、面白い顔だねえ。ドラ——もつとやれ」

ちよつと性格が歪んでいるのも彼の魅力だ!!

「あいよ!」(ぐりぐり)

優の号令と共にさらに腕の力を強めるドラ。

「うらぎりもの——!! 痛い痛い!」

「——なんて冗談だ。ドラ、もういいだろう?」

「そうだな。ほら、解放だ、公太」

助かった……。ドラめ、憶えてろよ……!

「それよりも公太。どうだった?」

「ギクツ」

……どうだった? って。もちろん告白のことだよ……。

「……………」

……うつ、どう言ったらいいんだろう……。

「……その様子だと”また”振られたのか」

——ばれた!?

「はあ!? あの雰囲気の中、振られたのか!?」

ドラの言うあの雰囲気とは金曜日の放課後のことである。

皆が祝福し、誰もが新カップル誕生を祝う(一部妬みの視線はあったが)ムードだったのだ。

「……ああ、振られちゃったよ」

うなだれる俺。

「マジか……」

「そうか。それは残念だ」

二人は、それがまるで自分のことかの如く、俺と一緒に落ち込んでくれたんだ。

お前ら、そこまで俺のことを心配してくれて……! (うるつ)

こういう時こそ、俺が元気になって二人を安心させて上げないと!

「二人共、心配してくれてありがとな!! でも、そんなに落ち込まないでくれよ! もう過ぎたことなんだし——」

「——じゃあ優の負けだな。学食のBセット、よろしく!」

……えっ？

「まさか麻雀と喧嘩以外でドラに負けるとはね」

「ハハハハ、俺はギャンブル全般に強いからな！」

あれれ？ 君ら、ひよつとしてボクで賭けをしていました！？

「まさかまた公太が振られるなんて計算外だ。今回は僕も手助けしたし九割は決まると思っていただけ。確立はあくまでも確立ってことだね」

「ギャンブルは計算じゃないからな。流れつてもんがあんだよ」

「ドラはいつも流れに恵まれすぎなんだよ」

……ぐすん……。どうしよう……。涙が止まりませんことよ……。

賭けに負けた優は、おもむろに財布から千円札を取り出して、ドラに手渡した。

「お釣りはいらさないから」

「サンキュ、優」

無駄にイケメンだな！ おい！！

俺は今、友情とはどうあるべきかを考え直すべきなのかも知れません。

「ドラ、お釣りで公太にも何か買ってあげてよ」

「そうだな、どうせなら全額、公太のために使つか！」

——やっぱり大親友だよ！ 二人共！！

————●○○●○○————

「ふー、今日も終わったか」

授業が終わって帰りのHRが始まるまでの時間って、一番リラックスできるよね。この解放感がたまらんね。

「そういえば今朝以降、朱夏から何も接触がなかったな。……あ、ウルモフ」

そう考えたとき、教室に担任が入ってきた。

「席につけー」

担任の蒙古先生。007のウルモフ將軍に似ていることから、皆からはウルモフと呼ばれている。

日直の号令の後、ウルモフの楽しい楽しい説教半分のHRが始まった。

必要事項とちよつとした小言の後、頭を掻きながら面倒くさそうに現在一番重要である案件を口にした。

「……あー、三週間後には学園祭があるだが、うちのクラスだけ出し物が決まってない。お前ら一体どうするつもりだ？」

——三週間後、我が校の学園祭が二日にわたって開催される。

でも我がクラスは、どうにも個々の自己主張が強すぎるというか、纏まりが欠けているというか……。

「zzz……」

……優は寝てるし。

「腹減った……。もう我慢できん!!」

……ドラはこっそりとパンをかじり。

「盗まれてるーーーー!?」

……朱夏はケータイゲームに夢中。

我がクラスはこんな奴らばっかりなわけでして。未だに出し物が決まってないのだ。

「このままでは何も出来なくなってしまうぞ！ 誰か良い案はないのか!？」

ウルモフが怒鳴り、静まり返る教室。無理も無い。

何故ならこの質問は、今まで幾度と無く繰り返されてきたものだからだ。

実はこれまでに幾つも案は出されてきた。しかし、その度に男女間で論争が繰り広げられ、対立。結局纏まらず廃案になってきたのだ。

次第に誰一人として案を出さなくなり、現状に至る。

「……はあ。お前ら、残りは三週間しかないんだぞ？ 本当にどうするつもりだよ」

ウルモフもいい加減にしろといった表情で嘆息している。そうは言ってもなあ……。

そんな中、クラス委員長である朱夏が、唐突に立ち上がり提案した！

「占いをやります！！」

「……占い？」

女子（テニス部）「あ、それいいかも！」

女子（ラクロス部）「私、賛成！……和久井君との相性……占ってもらおう……フフ」

女子（相撲部）「それちょべりぐー」（死語）

女子の間から賛成の声が上がる。なるほど、女の子は占いが好きだもんね。

しかし、男子の間からは反対が噴出。

男子（サッカー部）「占いなんてつまらないだろ！」

男子（野球部）「ソノヤーツス！」（そんなのやる気でねーツス）

男子「デュフフ、それ、リア充しか喜ばない内容ではないですか」
K。ねえ、公太氏い」

……リア充ってなんだ……？

優「ZZZ……」

ドラ「はぐはぐはぐ——うっ！！ 喉が……！！」

……と揃って野次を飛ばした。この流れはいつもの論争パターン……！

「おいおい、大丈夫かよ……」

心配して朱夏を見ると——

——わ、笑っている！？ この状況を！？ なんだあの冷徹かつ余裕な笑みは！？

次第に大きくなる男子の声。そんな中、朱夏は凜として言い放った！

「——巫女服」

「「「——！?!?」」」

この言葉に反応しない男子はいなかった。騒々しかった教室が、一瞬にして張り詰めた空気に変わる。

「みんな、よくお聞きなさい!!」

「ぐふっ!」

朱夏はウルモフを押し飛ばして壇上に上がり、力強く演説を始めた!

……大丈夫か? ウルモフ……。

「占いで最も大切なこと。それは雰囲気よ。タロットにしろ、手相にしろ、客に神秘的な雰囲気を感じさせることが一番なの。そのため非常に重要になるのが衣装。そして日本人がこよなく愛する神秘的な衣装。それは一体何?」

「巫女服です!」

——と誰かが元気よく答える。……ドラだった!

「その通り! だからこそ——」

ゴクリという音が聞こえてくる。やはりドラだった。もはやドラの眼は龍のように猛々しい。……てか血走ってるだけか。

クラス全員の視線を一身に浴び、朱夏はとどめの一言を言い放った!

「——女子は全員、巫女服を着ます!」

「「「賛成だ——!!!!!!」」」

男子たちは大いに叫んだ! 魂の叫びつて奴だね!

この叫びの中には、もちろん俺の声も含まれている! 一番大声を上げていたのはドラだったが。

女子(相撲部)「ちよっち男子ガチうるさいんですけどー、チヨ

ベリバ」……」（そろそろウゼエ……）

女子（ラクロス部）「ちよつと巫女服着てみたかったしいいかもね！ 男子にはドン引きだけど！ ……和久井君に見せつけよ……フ」

女子（テニス部）「巫女服、楽しみだね！」

意外なことに女子たちから反対意見は出なかった。みんな巫女服に興味があつたんだね。優以外。

……というかこんな大歓声の寝続けられる優、すげえ……。

我がクラス初、満場一致でクラスの出し物は占いに決まったのだつた。



「公太」

怒涛のHRが終わつて間も無く、朱夏が声を掛けてきた。

「とうとう現れたわよ、主人公が。しかもこの教室に」

「なんだって！？ もう主人公が！？ しかもこのクラスだ！？」

やばい……緊張してきたぞ……。

朱夏には主人公時間を迎えた人間がわかるらしい。一体誰なんだ……！？

今は放課後。教室に残っているのはごく僅かだ。

「この中に主人公が……。だ、誰なんだ？」

緊張が走る。喉が渇く。何せ俺はこれから当分の間そいつのサポートに徹する脇役にならねばならないわけだ。見知った顔なら幾許かはやりやすい。

朱夏が人差し指を立て、ゆっくりと矛先をターゲットに向ける。

「主人公は………あいつよ！！」

朱夏が指を差した生徒。あの姿は……。

「……マジですか……！？」

俺の目に映った生徒。それは我がクラスで最も影の薄いと称され

た男。

「マジよ。今回の主人公。それは——ホッチキスよ!!」

「……………ホッチキスだと……………!!」

——ホッチキス。本名は確か倉敷啓……………だったはず……………。
クラスで最も目立たないのに、皆勤賞。

そして”何故か常にハサミやホッチキスを持ち歩いている”という”目立たない奴あるある”を総取りしたかのような男なのだ。

それゆえに付いた仇名が”ホッチキス”。

「大丈夫なのかよ!? ホッチキスだぜ!? あいつが誰かと会話しているところすら見たこと無いんだぞ!？」

「でもやるしかないのよ? でないと一生——」

「やります!!」

……………その先を言われるのがとにかく怖いぞ……………。

「そしてヒロインは——ああ。あの子ね。……………ププッ!!」

「ヒロインだって!? ホッチキスの相手のことか! 朱夏さんや、何で笑っているのですかな!？」

「ハハハハッ、ヒー、お腹痛いわ……………! ごめんなさい、だって今回のヒロインって、先週公太が振られた相手なのよ。これはまた災難ね!! ハーッハハハ」

「……………お前、同情する気すらないだろう……………」

朱夏は顔を真っ赤にして笑っていたが、俺の顔面は蒼白になっていた。血の気が引いていくのがわかる。

「そんなのって、ありが? まだ心の傷、癒えてないんだぞ!？」
「仕方ないでしょう? もう決まっただから」

先週、俺が振られた相手。それはクラスでも朱夏と人気を二分するほどのアイドル的存在。

「そんな……………まさか巡崎さんだなんて……………!!」

巡崎美都。それが彼女の名前だ。あだ名はみっちー。

美術部所属で、在学中に多くの賞を受賞している我が校きつての天才だ！

それでいて自分の才能を鼻にかけることもなく、おっとりとした性格で誰にでも優しく、男女問わず大人気のアイドルなのだ！

それに付け加え、あの高校生離れしたスタイル。胸もデカイ事も然ることながら、特筆すべきはあの尻！！素晴らしきかな安産体型で、モロ俺の好みだったのだ！！

——そう、俺は尻フェチなのだ！！

「信じられん！　だってあの巡崎さんだぞ！？　ホッチキスとなんて考えられん！！」

「でもホッチキスなのよ。これはもう変えようのない事実。……そうだわ、公太にもこれを見せてあげる」

そう言つて朱夏はバッグの中からヘンテコな形のメガネを取り出した。

「”見縁メガネ”……！！」

「……なんだそれ？」

「このメガネはね……。なんと！　人の主人公時間を見ることが出来るのです！！」

「見縁みえんのに見えるのか！？」

「ふふふ、洒落が聞いていて面白いでしょ？」

「いや、そんなに面白くないけど……。でも。」

「そんな便利な道具があるのか！？」

「そうよ。公太、これでホッチキスを見てみなさい。面白いものが見えるから」

俺はおずおずとメガネを手に取り、そつと掛けた。

「見えてきたでしょ？　……”縁の糸”がね……」

ホッチキスを見る。特に何も変わった様子はない。……だが。

「……………おお！？」

見えた！ 微かにだけ間違はなく！ ホッチキスの左手薬指から、赤い糸が伸びていた！

「なんだあの糸！ あれが縁の糸っていうやつか！？」

「そ。主人公とヒロインを繋ぐ糸よ。運命の赤い糸っていうのは、これが由来なのよ？ 主人公の糸が、ヒロインの指に結ばれたら晴れてカップルになれる」

「ふむふむ。でも、その糸と主人公時間ってどう関係あるの？」

「糸の長さ」主人公時間の長さなの。糸が長いと、それだけヒロインの指に近づきやすく、結ばれやすい。そうイメージしてもらって構わないわ」

へえ、へえと、俺はエアへえボタンをバンバン叩く。

「しっかりと見てみて。ホッチキスの糸がどこに繋がっているかを」

……予想は出来ているけどね。でもこの目で見ないと信じられない。

「……あつ！」

予想通りの結果が突きつけられる。ホッチキスの糸は——巡崎に繋がっていた。

「分かったでしょう？ ホッチキスの糸は、みっちーの指に結ばれている。だからホッチキスが主人公で、みっちーがヒロインってこと」

……分かっていたとはいえショックだ……。

だってそうでしょう！？ ボク、コクったの三日前なのよ！？

朱夏「そうだ公太。自分も指を見てみなさい。一目瞭然よ」

え……、ボクの指……？

恐る恐る自分の指を見ると……。

「ない！ 赤い糸どころか、その糸屑一つない！！」

「そういうこと。それじゃヒロインと結ばれるどころか、結ぶのに必要な長さすらないでしょ」

「そういうことなのね……」

改めて自分の境遇を突きつけられた感じだったね。だって、一ミ

りもないんだよ？ 縁の糸。

「ちなみに私はメガネなしで見ることが出来るわ。それが私の能力なの」

「能力！？ なんかかけえ！！ 能力者バトルが出来るってか！？」

「……出来ないわよ。はい、メガネ返して。分かったでしょ？」

確かに見えた。まだ細く、薄っすらとだが、でも間違いなく縁の糸は繋がっていた——だが！

「それでも納得できるか！ それに俺はまだ彼女のことを——」

「諦めてないの？ どんなことをしたって、絶対100%無理なのに？」

「し、しどい！ そこまで言わなくても！！ 鬼！ 悪魔！」

「巫女です」

「そうでした」

…… 案外余裕なのか？ 俺。

「公太が諦めていようがいまいが関係ないの。もう縁の糸は繋がったのだから」

分かってている……。分かってはいるよう……。！ だけどう……。

「やらないと一生ど——」

「やらせていただきます！——」

背に腹は変えられん！ 今しがたの辛抱であるぞ！ 頑張れ、俺！

「でも、俺はまだ手順なんて聞いてないぞ？ どうすんだ？」

「とにかく今は声を掛けるだけでいいわよ。少し会話したら戻ってらっしゃい」

それが一番難しいんだよね……。 ホッチキスと会話したことなんて。

『ホッチキス貸して！』『はい』『ありがとう』

…… くらいしかないしな……。

とにかく俺の人生が掛かっているんだ。声を掛けるだけ掛けてみよう。後は何とでもなれだ！

「あ、公太。一つだけ注意事項を言っておくわ」

勇む俺を朱夏が止める。俺が朱夏に視線を返すと、朱夏は真剣な眼差しを向けてきた。

「絶対にみつちーと付き合わないで」

——！？

「それはどういう意味だ！？　そもそも脇役はヒロインと付き合えないのじゃ？」

「そう。付き合えない。でもね。付き合うに至るまでは常人と同じなのよ」

付き合いに至るまで……？

朱夏は話を続ける。

「主人公時間のない人間でも、付き合う前までは普通に誰とでも接することが出来る。でも、いざ付き合うとなると話は変わってくるの。告白やキス、それに準ずる行為は全てNG」

「つまりどういうことだ？」

「それは主人公のヒロインを奪ってしまうことになるから」

「……ヒロインを……奪う……？」

「そう。今回の場合、公太がみつちーに告白したり、されたり、キスしたりすると全てが終わりってことね」

「……ありえるのか？　そんなこと」

「ありえるわ。先に言った通り、付き合うまでは普通に接することが出来るの。絶対に忘れないで。主人公のヒロインを奪ってはいけない。たまにあるのよ。我慢できなくなって脇役がヒロインを――」

――

「絶対にしない！　するわけないだろ――！」

俺は一度巡崎に振られているんだぞ？　ありえないって。

「そう。なら安心ね。でも公太、気をつけなさい」

朱夏はさらに険しい表情になり、言葉を続けた。

「主人公やヒロインは脇役次第で大きく心境や行動が変わる。公太のちよっとした間違った行動が、後で大きく響くこともある。公太

が良かれと思って行動しても、それがマイナスに働くときもあるの。こればかりは予測できない。だからとにかく気をつけなさい」

「……判った……」

俺が良かれと思っててもマイナスに働くこともある、か。気をつけなきゃな……。

「だからといって萎縮しちゃだめよ！ 最初はとにかく目立つこと！ それだけを頭に入れておきなさい！」

気をつけながらも、とにかく目立つ。こいつぁ、ハードだぜ！

「では公太！ 早速行動開始よ！ 行ってきなさい！！」

「ああ！！」

ついに始まる俺の脇役人生！ 一生童貞は嫌だ！ 絶対に主人公に帰り咲いてやるぜ！

——●○○●○○——

名脇役への第一歩。それはずばり、主人公と仲良くなること！

今までまともに話したことはないけれど、なんとかなるだろう。

いや、なんとかしよう！

いくぜ！！ 俺！！

「なあ、ホッチキス！」

「——！？ ……な、何かな、里美君……。何か用……。！？」

そりゃ驚きすぎだって、ホッチキス。俺から声をかけられるのがそんなに珍しいか？

……珍しいよな。俺だって久々に話しかけたんだから。

「いや、用があるってわけじゃないんだ。ただ……」

「ただ……？」

「……」

「……」

うつ。予想以上に会話が持たない……。

そつだ！ こういうときは共通の話題を振れば無難だ！

まずは——これで攻めてみるか！

「数学の授業、眠かったよな！」

「……僕はそうでもなかったんだけどな」

何ですと！？ あの数学が眠くないとな！？

「で、でもさ。微分とか積分とか、聞いてるだけで眠くなるだろ？」

「そんなことはないよ……。僕、理数系の大学目指してるから微積分は勉強しているし……得意なほうだよ？」

「マジか！　じゃあ今日の宿題の答え、見せてくれよ！」

「あ、うん……。別にいいけど……」

よっしゃ！　これで今回は優に借りを作らずに済むぜ！

……って目的が違う！　そうじゃないだろ、俺！　何か話題を——そうだ！

「体育のサッカーはどうだった？　楽しかったよな！　何せ俺はハットトリックを——」

「僕、運動は得意じゃないから……あまり楽しくなかったよ……。里美君は運動できるから羨ましいよ……」

サッカーが楽しくなかっただって！？　俺なんて体育がなかったら学校に来ないくらい楽しみなのに！

俺と好みが正反対だなんて……！　ダメだ、仲良くなれる気がしない……。

くそ……ひとまず話題を変えるぞ……！！　次は——これだ！！
「ウルモフ、どうなったかな？」

朱夏がHRにて押し飛ばしたウルモフは、勢いのままに頭から転倒、保健室へ運ばれていた。

「そう言えば、どうなったんだろ……心配だね……」

「ああ……心配だな」

「そうだね……」

……は、話が续かねえ……。

その時、唐突に教室の扉が開いた！

「痛たたた……、まったく委員長の奴、無茶苦茶しやがる……！」

気まずい空気の中、頭に氷を当てたウルモフが教室に戻ってきた。
「ウルモフの兄貴！ 無事だったのか！ てつきりフィリップンで戦死したのかと……」

「誰がウルモフだ！ 勝手に殺すな！ しかもそれ、”はだしの。ン” ネタだろ？」

「よく知ってるな……、ウルモフ……」

「お前もな……。そいやお前ら帰宅部だろ？ さっさと帰って勉強でもしとけ」

それだけ言つとウルモフは顔をしかめて教室から出て行った。

「ウルモフ、無事だったな……」

「……そうだね……」

「またもや気まずい空気。」

「こんな空気、耐えられねーよ！ ダメだ、さらに仲良くなれる気がしない……」

「待て待て、ここで諦める訳にはいかん！！ とつておきの話題を……！！」

「昨日のプロ野球の試合、見たか？ 我らがジャイアンズムの圧勝でさ！」

—— 押売魔神ジャイアンズム！ 他球団の良選手を悪魔の誘いで（金の力）で引き抜き、圧倒的財力でリーグを勝ちぬく俺の好みの球団だ！

「いやー、良かったよなあ……。何せ打順1〜8番までの全員が去年まで他球団で4番だった選手だもん！ まさにオールスター！」

俺が嬉々として話し出すと、それに反比例するかのようにホツチキスの表情は沈んで行った。

「……僕は相手のタイガルドズのファンなんだ……」

—— なんだと！？ タイガルドズファンだと！？ 天敵ではないですか！

—— 関心タイガルドズ。ジャイアンズムとは正反対で選手一人ひとりをじっくりと育てる地味な球団だ。俺の趣味に合わん！

「ジャイアニズムズは少し強引すぎるよ……。野球はタイガルドズみたいに選手を大切にしなきゃ……」

「そ、そうか？ 俺はあの傲慢なプレイスタイルが大好きなんだけど！」

ジャイアニズムズとダイガルドズは因縁のライバル、犬猿の仲なのだ！

無論、そのファン同士の仲だって悪い！ ダメだ……。もはや仲良くなれる気がしない……。

「……里美君……僕、帰るね……」

「お、おう……。じゃあまた明日な……」

ホッチキスは早々と教室から出て行った。



「このバカ……！」

「ゴボウアツ！」

なんだ！？ すごい音がしたぞ？ ……って、いてえ！！

「何なの、あのやり取りは！ 新手のコント！？」

怒号を上げる朱夏が、俺の腹に見事な正拳突きをお見舞いしていた。

「……グフ……みぞおちじゃなくて良かった……。って、何も殴ることは無いだろ！」

「公太、やる気あるの？ ホッチキス、完全にあなたのこと呆れてたわよ？」

「仕方ねーだろ？ 話すことがないんだからさ！」

「それにしたって空気を読まなさ過ぎよ！」

無茶言っなよ。俺だってこれでも頑張ったんだぜ？

……などと言える空気ではないことは読めた。

不機嫌な朱夏だったが、しばらくすると何かを閃いたような表情に変わる。……嫌な予感。

「公太。あなた今までずっと主人公をしていたでしょ？ だから脇役に慣れてないのよ」

「うゝむ。そうなのか？ 今まで主人公の自覚なんてなかったけど」「自覚がないってほどに、主人公してたのよ。さすがは”元リア充”ね」

「リア充って、なんだ？」

「お、おい？ 朱夏、どうしたんだ？」

「一体どうしたんだ！？ 朱夏がなにやらブツブツ言いながら震えている！？」

「……ん？ どうして拳を握り締めているんだ？ ……って、グオエエエツ！！」

「今度はみぞおちに入った……。い、息がでкин……！！」

「……だ、だから……な、んで殴るんだ……？」

「ふん！」

「倒れこむ俺を見下しながら、腕を組む朱夏が言い放つ。」

「リア充という言葉を知らない時点で、リア充なのよ！！ ……なんで私がこんな説明しないといけないの……」

「な、なんでそんなに怒っているんだよ……？」

「うるさい！ リア充ってのは昔の公太見たいな奴のことを言うのよ！！ モテモテでウハウハで毎日がリアルに充実していたでしょ？」

「朱夏は俺にびしつと突きつけて、言い散らす。」

「でも良かったわね！ あんたはもう立派な”元”リア充よ！！」

「”元”言うな！ 今だって十分そのリア充ってやつだ！」

「主人公時間が無いんだもの。これからは一生リア充になれないかもよ？ とすると一生童貞——」

「止めてくれ——！！」

「これからのためにも脇役の何たるかをしっかりと教える必要があるわね……」

「聞きたくない！ 教えてほしくないぞ！ そんなこと！」

「公太、これからね——」

「あー、あー、聞こえませんか！」

えーい！ 耳を塞いでやる！！ 俺にはもう何も聞こえん——…

…！？

「グエエツ！！」

「またもや腹パン。ちよつと殴りすぎじゃないですか！？

「ちゃんと聞きなさい」

「はい……」

暴力反対！ と言える空気でないことも分かる。

うん。やっぱり俺、空気読めるじゃないか！

「いい？ 公太、これからね」

「はい……」

「うちに来なさい！！」

「はい………ええっ！？」

——と言うことで、俺は半ば無理やり朱夏の家に行くことになったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7768y/>

すぴんおふ！

2011年11月23日22時54分発行